チョーサー没後600年

——中世詩研究の今——

奥　田　宏　子

1．時間の持続性の中で

「英詩の父」と呼ばれる中世イギリスの詩人ジェフリー・チョーサーの生涯やキャリアに関する直接資料は、本来、きわめて少ないが、その少ない資料が西暦1400年の10月25日を機に完全に途絶えた。したがって、この日が彼の死亡推定日になり、墓標にも1400年10月25日没と刻まれている。西暦2000年には、こんなわけで、チョーサー没後600年を記念する大小さまざまな行事が世界各地でとり行われた。

最大の行事は、今日のチョーサー研究者の拠点となっている「新チョーサー学会」の開催である。会場はロンドン大学、2000年７月中旬の４日間をフルに使っての国際大会であった。当地、日本でもその後11月に慶応大学を会場に没600年記念チョーサー・シンポジウムが聞かれ、上記「新チョーサー学会」の新会長ヘレン・クーパー（オックスフォード大教授）とアメリカの碩学W・ウェザビー（コーネル大教授）が講師として招聘されて来日、講演した。

小文では、ロンドン大会への参加体験談をまじえて、日本でのシンポジウム出席をふり返りながら、６世紀という歳月を経た今日のチョーサー研究の状況や今後の課題について省察してみたい。新世紀を迎え、ちょうど切れ目の年でもある。チョーサー詩研究に代表される「中世詩の研究」全

般について、再考する好機といえよう。

ロンドン大会には、最新の研究成果を携えて世界各地からチョーサー研究者が集まった。討論はロンドン大キャンパスに分散するいくつもの建物を使って、分科会に分かれて行われた。大英博物館近くの閑静な地区が会場とはいえ、一歩なかに入ると室内は討論の熱気に溢れていた。この詩人が600年の歳月を経ても、いまなお文学研究者の新鮮な注目を浴びていること、彼らの研究心をがっちり掴んでいること、を実証するような光景がそこにあった。

そんななか、時折、討論から目をふと窓の外に向けてみると、大通りの交差点の信号が静かに点滅している。信号が青に変わると一斉に人々が道路をわたって行く。遠い600年前、光景はまったく異っていたとはいえ、チョーサーも同じこの町に住んだわけだ。いま窓の外に息づくロンドンの600年の歴史を心に描こうとする。この町が育んだ詩人たち、その筆頭のチョーサー、チョーサー研究の一端に繋がる一人として、そこにいる自分自身の研究についても。

ロンドン大会では、チョーサーその人の存在がこの町であたかも今も「生きている」かのように、詩人の「生の証(あかし)」が親しく語られる体験をした。時間を超え出て、その生が再現され、その詩が研究されるとは、その詩人へのなんという大いなるオマージュであることか。かつて詩人が住んだまさにその地に「新チョーサー学会」は参集した。そこで詩人への敬意を新たにした。没後600年の記念の輪を作り、会員たちはチョーサーに自身をふたたびつないで帰ったのではないだろうか。

学会長（当時）のジョン・ストローム氏は初日の基調講演「チョーサーの場所（プレイス）」で、この辺の事情を簡潔に説いて、感銘深かった。（過去の詩人を）「記憶すること」の「本当の意味」について話したストローム氏は、過去の詩人を現在から切断すること、加えてその文学的業績

を客観化すること、は詩人の忘却につながるとした。「今」そして「これから」へと連なる時間の持続性のなかで、われわれが彼を回想し再構築する、そのことが詩人を「記憶すること」である、と述べた。

たとえばチョーサーを現代からまったくかけ離れた「中世詩人」の既成枠に入れてしまうならば、ストローム氏のいう「詩人の、また記憶の、切断」が起こる。まず政治的社会的に複雑きわまる十四世紀後半の特定的な文化・人脈のなかに、とりわけて都市ロンドンのさらにそのなかにあった幾多の絆や親密なサークルのなかに、チョーサーを一度置く（プレイスする）こと、そのうえで彼を今生きるわれわれの心に回帰させること、これが具体的にチョーサーを「記憶する」ことになるということだった。

ストローム会長の講演タイトル「チョーサーの場所（プレイス）」は二重の意味を持った。ひとつは今回の地理的な開催地でチョーサー作品を生んだ都市（場所）としてのロンドン、もうひとつはチョーサー研究史における「今」の「位置、場所（プレイス）」である。チョーサーの「場所」は「今われわれのなか」にある、と講演は結ばれた。

この結論は、今回の国際学会で示された、チョーサー研究の動向の一局面をよく言い表している。じつはこの同じ学会は、つい最近、「私は（600年後の今）なぜチョーサーを研究するのか」をテーマに、広く学会員に賞金つきの論文を募集したばかりだ。個々の研究者がチョーサーと自己との関係について考えることを促がす、この種のエッセイの公募に、文学研究への内的な根拠を各研究者に求める動きが認められる。研究対象である詩人と自己との関係を尋ねるとは、すなわち「過去」（詩人）と「現在」（自己）の関係を自らに尋ねることとなる。

2．［古い文学］とともに

認めざるをえない昨今の実情は、「古い文学」の研究が必然性と必要性

をますます持ちにくくなってきたということだ。インターネットを代表格とする情報革命によって、「スピード」が価値となっている。前へ前へと果敢に突進する、なぜか突進せざるをえない時代にあっては、ふり返る「過去」よりも待ち望む「未来」が関心事だ。文学研究の場にあっても、この傾向はおのずと反映されている。

チョーサーに比べれば時代的には200年も「新しい」、世界的に揺るがない名声を同じく確立している大作家シェイクスピアですら、お国元イギリスのある有名大学で、必須カリキュラムから外されたと報じられて驚いたのは、つい先年のことだ。

文学作品について、「もう古すぎる」と簡単に決めこんで、価値を認めようとしないひとがいる。だが人間の文化遺産への自然な敬意からして、「古い」「新しい」で価値を決めるのが、早急すぎるのは論を待たない。だが残念ながら、文学遺産のうちでもとくに数世紀を隔てた中世文学の研究意義に関して、進歩を価値とする「未来志向」の時代は、厳しくなっている。

ここまで嘆いたところで、公平を期すため、とりあえず、この傾向がもたらしたプラス面に急いで付言したい。つまり「古いもの」へのこの厳しさが、逆に文学研究の一面を促進している点についてである。まず、「古い文学」否定に抗して、研究の意義が真剣に自問されていること、つぎに文学史上で不動とされがちな固定的権威としての「古典」の見直しが生じたこと、がある。プラスの副産物としては、「古典」から外れて見逃されてきた諸作品（とくにマイナーな）へのあらたな注目、発掘、再評価がある。

「古典」といえば、チョーサーは早くからそして長らくヨーロッパ文学史上での「古典」の地位にいる。彼は、したがって、「古い文学」への消極的・否定的評価の時代を生き抜いているばかりでなく、古典的権威の見直しという近年の批評の嵐にも十分にさらされてきた。そしてチョーサー研究もチョーサー自身も一度も負の力に屈した形跡はない。彼は不思議なタフさでもって今も健在だ。その様子は、まるで波乗りをして遊ぶ元気な

子供のようだ。この明言に対して、チョーサー研究に関わる大方の賛同は得られることと思う。

6世紀を隔てた詩人であればこそ、彼を学び、教え、研究する者は、「なぜ」と問い続けざるをえないともいえる。研究の道筋で、その「なぜ」に対して、今生きる「私自身の」答を常に更新しなければならないとなれば、「過去」は「今」に引き寄せられる。二つの時間は統合を迫られる。不思議なことだが、決して容易ではないはずのこの統合が、チョーサー研究にあっては、あまり無理なく行われている。これはチョーサー研究に携わる多くのひとが気づいていることだろう。そこにチョーサーの類まれなる、ほとんど「永遠」の相を包含するかにみえる、知性の力を私は見る思いがするのだが。

慶応大学でのチョーサー・シンポジウムで講演したクーパー教授は、チョーサーが今日なおわれわれをとらえる魅力の秘密を、「詩人の二面性」という言葉で解明しようとした。よく知られているように、チョーサーの多面性、多義性は彼の特長を語る際の長年の定番ではある。これは彼の作品に触れるほとんどすべての読者がただちに感知する特徴である。クーパー教授の分析は、したがってそれ自体の目新しさにおいてではなく、むしろ長らく知られた事実を確認するその仕方の果敢さや率直さから、聞く者を納得させる力量をもっていたといえる。

これだけチョーサー研究が進んでも、チョーサー作品についてわれわれが今なお語り尽くせないものを感じているのは事実である。クーパー教授は、チョーサー作品が「これか／あれか」の選択を迫る解釈にたいして確答を呈さないことを、再度、明示したが、詩人と今日のわれわれとを結びつけ、その接点となっているのが、まさにこの点であると私には思われる。われわれは、決して確実に知ることはできないであろう「チョーサー特有の躊躇」の意味を追いかけて作品を通じて彼を追体験するが、まさにその

経験の中でわれわれは彼と共にある、もしくは彼の詩に「触れる」、つまり過去と現在の統合を経験するのだ。

「新チョーサー学会」ではエッセイ・コンテストで「今なぜチョーサーを研究するのか」をテーマに広くエッセイを公募したことを先述したが、それに応募して最優秀賞を獲得したロバート・メイヤー・リー（イェール大）は別の言葉でチョーサー作品の同じような魅力を説明した。チョーサー作品にはそこに「見え隠れする」捉えどころのない「妖精のような」作者がいて、「磁石に吸い寄せられる」かのように「研究者の自分」はそれに魅惑されている、と。

チョーサー研究は、メイヤー・リーにとっても、「答のない研究」である。だがおそらく、答があるべくもない「ひとの生」を対象とする文学研究においては、これが王道だと言ってよいような気がする。

学会最後の日、チョーサーが埋葬されているウェストミンスター寺院の「詩人たちのコーナー」で朗読会が開かれた。代表作品からの抜粋を朗読した数人のなかに桂冠詩人アンドリュー・モーションの姿もあった。ともにイギリスを代表する、中世詩人と現代詩人、この二人が没後600年の記念行事を介して出会った。

朗読会は一般市民にも公開され、チョーサーの肖像が大きく刷られたポスターがウェストミンスター寺院の前に立て看板として置かれていた。列に並んでいると、中年の婦人が普段着姿で、公民館でみつけたというビラを手に、息せき切って駆けつけた。待ち時間の短い会話から、ロンドン生まれで二児の母と分かった。小さな声で『カンタベリー物語』の一節を、東洋からの見知らぬ旅人の私に暗誦してみせてから、「ときどき家族の前で朗読する」と言った。チョーサーがこうして今もロンドンっ子に日常的に親しまれていることもまた、今と600年前とを繋ぐ絆の嬉しい一例と心に刻んで帰国した。